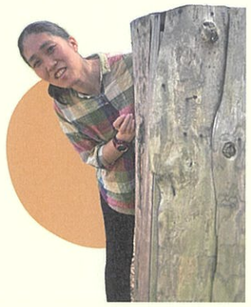
ひとはの日々

誰でもが共に暮らせる社会

ひとは工房 二宮由香里

外で陶器の恐竜の写真を撮っていると「かわいいのがあるでぇ」と隣で工事をされていたおじちゃんお二人が見に来られました。「あの中で作ってるんですよ~よかったらどうぞー」ちょこちょこと見学者さんが来られるので、みなさんすっかり慣れた様子で「これ僕が作っている陶器なんだ」と説明をする枌岡さん。内藤さんも自分の仕事を一所懸命伝えました。「へー!すごいのぉ。こんな器用な事はワシにはできんでーあらましな事はできるけど」「ここで焼くんかー」と窯にも興味津々。「この中でワシも焼いてもろーて骨にしてもらおうかのーわっはっはー」「見してくれてありがとうのー」と現場に戻られました。ふらっと入ってもらえて、誰でもが共に暮らせる社会を感じた瞬間でした。



いままで見たことなかった服

共同ホームひとは 安永琴未

いつものようにトレーナーを着て2階に降りてきた坂井さん。今日は暑そうだったので、一緒に着替えに行くことに。「見て」と引き出しから取り出した服は、今まで見たことのなかった7分丈のシャツ。「みんな驚くよ」とワクワクしながら着替え、2階に降りると「いいねー!」「おしゃれー、かわいい!!」と大絶賛!!!

屋根に放り上げたスリッパ

ひとは作業所 中村誠

増長さんの靴など物を放り上げること、私が初めて会った広島北養護の中学部、13歳の頃からやっていました。ひとはでの昼食後、寺尾真さんにしきりに屋根に上げたスリッパを取ってと頼み、屋根の上から下に放り投げてもらって大喜び。スリッパがあるはあるは5足。それらを抱えて、また大喜び。今は来客用のスリッパですが、以前は文尚さんのスリッパを投げ上げていました。投げ上げた物がゆっくり上がって落ちてくる放物線が好き!

編集後記

2年前、9月号の作成過程で文尚さんに通信を見てもらった時、「この通信を作る意図はなんや?」と問われた。この内容は写真があると情景が伝わるのに…、この絵をカラーで載せられたら…と思い、9月号を特別版として編集することにしたが、意図というより理由を説明したように思う。文尚さんが「なるほど!」と思われるような返答ができなかったと思い返す。この紙面だから伝えられるものを試行錯誤していきたい。

編集委員 竹内宏美

ひとはつうしん hITOHATSUUshIn

題字：石田博司

意思決定支援

“意思決定支援”をテーマにスタッフで座談会を行いました

則川 靖久
ひとはに20年以上勤めている

佐々木 美春
勤務4年目 ひとは作業所で活動

矢口 詠依子
相談支援業務に携わって8年目

白井 くみこ
成人の生活の場や児童部門に携わって15年目

文尚さんとのエピソード

私と文尚さん

ひとは長屋 次郎水貴史

私と文尚さんは、似島学園の時からの付き合いでした。似島学園を卒業し、広島市内の企業で4年勤めた後、文尚さんを頼ってひとはへ入りました。人に心配かけたり、困らせたりした時、「人に心配かけたらいけんで。よう自分で考えんとダメで」と言われました。あの時の文尚さんはとても恐ろしかったです。時には優しく、時には厳しく接してくれた文尚さんが2年前に亡くなったのは、私も教え子の一人として悲しかったです。文尚さんの教えをしっかり継いでいこうと私は思っています。

お茶しましょう

ひとはぽっこ 鈴川容子

寺尾さんとお茶会をした最初のきっかけは、作業所で活動していた頃、片付けが済み、岩田さんが作ってくれたおはぎでお茶にしようと準備をしていたところです。おはぎの数は3個。その時、寺尾さんが仕事をしているところが目に入り、「おはぎがあるんですが、お茶しませんか?」と声をかけました。今思えば、なんと大胆だったこと! それからは、おいしそうなお菓子があった時に「お茶しませんか~」と声をかけました。支援についての話になると、寺尾さんから“こうだ!”と答えが出るわけではなく、「のう~鈴川さんよ~どうかの~」と問われ、一緒に考え道筋が出ることがありました。和やかな雰囲気のお茶会。寺尾さん、楽しかったですね。

社会福祉法人 ひとは福祉会
広島県安芸高田市向原町長田1857番地 ☎0826-46-2960 FAX 0826-46-4355 ✉ honbu@hitoha-fukushi.com
編集｜ひとはつうしん編集委員 印刷、加工｜ひとは福祉会 デザイン｜田中 賢
【イラスト協力】 竹内さんのイラスト｜高伏 洋和(たかふし ひろかず) レモンサワーのイラスト｜小野 健一(おの けんいち)

いしけっていしえん

theme 01　仕事で「自分はこれがやりたい」って言えない人の「やりたい」の見つけ方

則川：わしがアグリにかわったタイミングで牡蠣殻に穴をあける作業がなくなって、藤原さんに仕事何してもらおうかとなった。「**彼の好きなものなんかね**」ってなって、ホームでの生活でよく水使いよったよねから、手作業での洗浄でやってみてもらったら、まぁはまってね、自分の仕事っていうか自分がここにおってもいいんだと感じてくれたんかなと。**今までの生きざまや様子から考えていくことも必要**なんかなと思うわけです。

竹内：日常の仕草や行動から「こういうことやりたいんかな」と汲み取るんですね。

則川：一年間で三万枚以上の洗浄をしている。その頑張りが成果として表れて、給料渡した時にすごい嬉しそう。

竹内：「こんなことしたいかな」と考えて、個別支援計画に反映させることはありますか。

佐々木：ボソッと言ってたり、もしかして好きなのかなーて感じで合ってるか分からないけど「やってみる?」って言ったら笑顔になってくれる時があって、そういうのをこれもあれも好きなんだって溜めていけたら引き出しがいっぱいできるのかなと。**みんなの(好き)を見つけたい**なと。

theme 02　法人内実習で学んだこと

矢口：意思決定支援の三原則のうち、表出された意思というのは、文尚さんの話で、重廣さんが初めてラーメンを食べた時に「**これが食べたかったんよ**」と言ったのが参考になるかなと思います。経験したことがないことは拒否がひどくて、経験してみたら「なんだ、こんなもんか」となることが多いと普段の付き合いで感じます。

佐々木：アグリの活動に入ってみて、**チームで作業に取り組んでる**なっていうのが印象的でした。石田さんは作業所フロアでよく過ごされてるんで顔は知ってたんですけど、どんな風に仕事してるんだろうって気になっていて、石田さんと香川さんが一緒に作業している様子を見て、誰と誰でやりましょうと言われてるわけじゃないけど、何気なく一緒にやっている人たちがいて、チームワークができてるのかなぁと一番感じました。

則川：あまり介入しすぎないというか、やりたい仕事、得意な仕事あるはずなんですよ。でもやっぱり仕事をやっていく中で、これをせんといけんというのはあるんですけど、それぞれの得意な所を活かして、最終的にそれが一つのチームとしての形になればいいと思う。自分の思いを言葉として喋れる人、そうでない人とおってんで、その人が訴えたいと思っていること、そこを少なからず一週間の実習で感じてもらえればいいかなというところはありました。

佐々木：西崎さんとバスでたまにちらっちらっと会うくらいだったから、覚えられてないと思ってたんですけど、予定が違うっていうのを教えてくれて、その流れで私の名前書いてくれて嬉しかった。紙の予定とホワイトボードの予定が違ってて、気づいたって(伝えたかったよう)。

則川：(違っていると)指摘されることもある。でもお互いが気づきあえとると思う。

いしけっていしえん

theme 03　引き出しを増やしていく

白井：(くらむぼんには)いろんな段階の子どもがいて、経験をとにかくたくさんしてもらうっていうのを頭に置いてやっていて、まずは本物に触れるとか、実際に一緒にやってみるとか。三年くらい前のことですけど、当時小学一年生だった子がポテトサラダを作った時に、手順を一緒に確認していたら、「**ポテトサラダってジャガイモでできていたんだね!**」っていう感動があって。「なすびは嫌いなんだよ」って言いながら、揚げびたしを作ったら「嫌いだけどこれは美味しい」と食べられるものが広がる。子どもたちの中に経験や引き出しを増やしていくことを意識してやってます。

クッキングで包丁を使ってみる、バスに乗って出かけて自分でお金を払ってみるなどの経験をしてもらうこともありながら、**話し合いも大事にしてて**、本人たち(子どもたちのグループ)で考えてもらう、経験がある程度溜まってきたらそこの引き出しを使いながら話し合いもして、ぶつかり合うこともあるけど、結果この方が良かったとかを身をもって知ったり、**ルールをみんなで決める**とか、人から言われるより自分たちで決めた方が守れる。

例えば、ドッジボールでそれぞれのつもりのルールで遊んでて喧嘩になることもあって、こっちの子はこれはセーフだと思ってた、こっちの子はルール違反だって怒ってしまったところを話をして、じゃあここでのルールはどうしようかと決めることにも力をいれています。用意されたものだけじゃなくてみんなで作っていくのも大事かなと。

theme 04　目線を大事に

白井：言葉で表現できない子どももいるんですけど、そういう時は目の動きを見るようにしていて、(成人の)平岡さんの支援をする時もだったんですけど、自販機でジュースを買うのに、**絶対どこかで一秒くらい目が止まるところがあって**、「今日はこれだね」と思って買ったら、めっちゃ飲んだり。食事支援の時でもピタッと止まるものがあって、それをスプーンに乗せるとかをしていました。目線を大事にしています。

矢口：(もやいの業務で面談に同席する機会がたくさんあって)自分の意思を表出できる人の場合は、その人中心に支援計画が出来上がってますし、自分からの意思表出がなくても目線や普段の関わりで感じたことを取り入れた計画になっているなと感じます。意思決定支援に関する教科書読んで、改めて学ぶって難しいんかなって、今までできとるじゃんって感じました。

意思決定支援の三つの原則

- 【表出された意思】周りが介入せずに本人から出た思いや考え
- 【意思と選考に基づく最善の解釈】思い、考え、好き、嫌いを周りの支援者が読み取ったこと
- 【最善の利益】本人の自己決定や意思確認がどうしても難しい場合、関係者が意思を推定すること